

「院」の字音について

三 沢 諄 治 郎

一、問題の解説

「院」という字の日本における読音は、われわれの常識によれば「イン」であつて、いわゆる歴史的仮名づかいでは「キン」である。ところが此の字を机辺の字書類で検して見ると、漢音・呉音ともに「エン」であつて「キン」ではなく、「キン」は一種の「慣用音」ということになっている。

この事は可なりふるくから問題となつて来たのであるが、今更ながら、日本の漢字音というものの正体について、何かまだはつきりせぬ、云わば盲点とでもいうようなものがあることが感ぜられ、そういう疑問を抱いてながめると、日本における漢字音には此の例と同じような、或は似たような現象が数多く存在し、それが当然日本語の中の漢語にも関係の深いことなので、一体日本の漢字音は漢土のどういふ音系統をどの程度にうけ入れて来たのであらうかという疑問が生じ、ひいては日本の漢字音の歴史的変遷は漢土のどの線に沿つて動いて来たものかという疑問も生じ、更には此の線を溯上していくと仮名発生以前の日本の漢字音はどういう形であつたのかという問題にも達着する。

そのことは一転してそれと同じ時代の日本語それ自身の音韻の問題にも強く触れてくることなので当面の事柄は小さいように見えても決しておろそかにはできない現象といわなければならぬ。

それではどういふ方法を展開すれば問題の解明に役立つだらうかと考えてみる。それには種々な方法があろうけれども、「院」のよゆうな奇妙な感星的な字音の軌道を一々歴史的に洗いあげてみることも有力な一方法であると思う。「院」は本来漢土ではどんな字音を持つていたか。それが日本に伝わつた当時どのような変化があつたか、或は無かつたか、慣用音といわれる「キン」といふ字音は何時どこでどんな事情で発生したのか、日本に於いてか、漢土でか等々、それらの歴史的な事実を可能な範圍で詳しく調べあげてみる。そして一つの仮定的な結論を引き出す。つまり「院」だけについての小さい結論を出すのである。

このよゆうな作業を種々なケースにも同じように施して、ケース毎の小さな結論を次々と出して行く。それが何千何百という多数の例になるかも知れぬが、その結論群を似寄り似よりによつて分類して行くと、しまいは幾つかの少数の大きい結論群に帰着するだらう

う。此の幾つかの大結論を適当に活用すれば、漢土における字音変遷の諸相と、日本における字音変遷の諸相とを統括的にしぼりあげこの両者の間の関係や影響を相当しつかりとつかむことができるのではあるまいか。

大体の目安をこの程度のところにおいて、何よりも実地に数々のケースを処理してみることである。そして若しそこに方法上の欠陥があると考へたら、更にやり方を改めて行けばよい。要するに根気である。観念的な大ざっぱな論説は今や厚い壁につき当りつつある。この際この種の煩瑣な詮索も亦、難関打開のためには避くべきでないと思へる。

次に具体的な方法としては、第一に「院」字における「キン」音のような、いわゆる慣用音の使われた日本での状況を考へる。第二に「院」の漢土における字音の諸相を詮索してみる。第三は、中興に於ける現代諸方音の中に「院」(キン)のような変音を保っているところがないかと探してみる。右の三法を勘案して小さい結論を導き出すという段取りにならう。

二、現代の字書

日本に於ける「院」の字音がどのように扱われたかを知るためには、最初の基礎的作業として、現代に活用せられている漢和字典の類を一応点検してみるのが便利である。但し、字典類の表記をその

ままここに引き写したのでは非常に混雑を感ずるので、仮りに一定の形に整理して次に掲げる。

◎大字典(上田・岡田・飯島・栄田・飯田合著)

〔院〕①(漢音・呉音) エン(去声)。

②(漢音) クワン (呉音) グワン(平声)。

③(漢音) エン (呉音) ヨン(上声)。

④(慣用音) キン。

◎小柳漢和(新修漢和字典)

〔院〕①(漢・呉) エン(去声)。

②(漢・呉) エン(上声)。

③(慣用音) キン。

◎詳解漢和(服部・小柳、詳解漢和字典)

〔院〕①(漢・呉) エン(去声)。

②(漢) エン (呉) ヨン(上声)。

③(慣用音) キン。

◎字源(簡野)

〔院〕①(漢) エン(呉) キン(去声)。

②(漢) エン (呉) キン(上声)。

◎新字鑑(塩谷)

〔院〕①(漢・呉) エン(去声)。

②(漢) エン(呉) ヨン(上声)。

③ (通音) キン。

◎段沢大明解 (大明解漢和辞典)

〔院〕 ① (音) エン。△漢・呉音の区別をしな建前▽

② (慣用音) キン

◎貝塚中辞典 (貝塚・藤野・小野)

〔院〕 ① (漢) クワン (平声)。

② (漢) エン (去声)。

③ (慣用音) キン

◎諸橋大漢和。

〔院〕 ① (漢・呉) エン (去声) (集韻による)

② (漢) クワン (呉) グワン (平声) 集韻による)

③ (漢) エン (呉) ヨン (上声) (集韻による)

④ (慣用音) キン。

右の諸字典を一覧すると、大体において(漢音)(呉音)ともに(エン)で、(慣用音或は通音)が(キン)、その外、字典によつては平声の(クワン)(グワン)、又、呉音の上声として(ヨン)を挙げている。その中でひとり「字源」が(キン)を呉音として示したのは特異な形であるが、これは何に依つたのであろうか、後において再検の必要があろう。

漢音(エン) 呉音(ヨン)という型は、「園」「怨」「遠」などの線でわれわれには身近なものであるが、(クワン・グワン)とい

う用例は殆ど知らない。これは院の作り「完」に關係があるのであろう。所が、ここに(エン)と(キン)との字音を正式に兼ね備えたものとしてわれわれに馴染みの深い字がある。それは〔員〕で、これには(ウン)という音もあるが、〔院〕と大分縁の近いものである。然し、今は混乱を恐れて深入りを避け、必要に応じて、採り上げることにする。

- ① エン (平声)
- ② ウン (平声)
- ③ キン (平声)
- ④ キン (慣用音) (通音)

右のうち「員」(キン)(平声)という字音はよほど注目を要するものであり、殊に正音の外に慣用音として(キン)を重出している字書が多い。

三、日本の古い字書

右のように、とりあえず現代の字典の大勢を基礎として、捕えておき、次に日本のふるい時代の字書類はどうなっているであらうか、目ぼしいものを挙げると、

◎新撰字鏡 (平安前期)

〔院〕 于縮反、去。△つまり去声のエンという。▽

◎和名抄 (同)

「將助切韻」云、〔院〕 于變反、俗音均。△即ち唐代の韻書では

去声のエン、而して俗音は平声のキンであるという。▽

◎類聚名義抄(院政期?)

〔院〕干眷反、俗云キン。△即ち去声のエン、俗音キン。▽

◎伊呂波字類抄(鎌倉期)

〔為ノ部〕「院宣」「院司」「院号」等々。

◎下学集(室町期、文安頃)

〔書院〕

◎温故知新書(室町、文明頃)

〔書院〕

◎運歩色葉集(室町、天文頃)

〔寺院〕〔書院〕〔入院〕

◎新韻集(室町期)

〔院〕垣院、エン。△写本には垣が三水になっているが誤であらう。▽

◎堺本節用集(室町、天正頃)

〔書院〕〔入院〕

◎餓頭屋本節用集(室町末か江戸初期)

〔書院〕〔入院〕

◎易林本節用集(江戸初期、慶長頃)

〔書院〕〔入院〕〔院宣〕〔院家〕……等。

◎乾本節用集(?)

〔書院〕〔入院〕〔入寺也〕

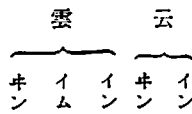
右の諸書を概観するに、漢土の字音を正音と建てるころの「和名抄」や「名義抄」は「エン」を正音とし「キン」を俗音として伝えている。

して見ると、「院」(キン)という俗音はすでに平安前期から認められていたものであるらしいが、同じ時代の実際の使用例はどうであったろうか。源氏物語には「院」「院司」などの語があるが、われわれの知り得る限りでは皆「るん」と読んで来ている。枕草子も「院」「院司」などすべて同様である。それならば、日本では「院」については俗音が専ら行われて、漢土の正音は影をひそめてしまったということになる。ただ、前記のように室町の末期にあらわれた一般向きの辞書「節用集」の類にいたって「書院」「入院」の二語だけに(エン・エン)という仮名づけがせられている。節用集は種類が多いけれどもその源流は一つであり編集の上にも互に深い関連をもっているで、そのうちのどれか一つが、こうした変わった音を取り入れたのであらう。

平安中期に成立した「和漢朗詠集」の岩波文庫本に附せられた山田孝雄博士の解題によれば、「附訓のうち、今日の語と一ならざるもの少からず。字音には……院(エン)那(クキン)熱(ゼツ)月(グエツ)の如きあり。」「この本にとれる訓は、朗詠集のよみ方としては大半は鎌倉時代その他は下りても室町時代までのよみ方に

よれるものなることを認めうべし。」とある。朗詠集には「院」の字はただ一箇所に見えるのみと思うが、とにかく漢字としての正音であるべき(エン)が極めて稀れに、又は特殊な少数の語だけに例外的に使われたことは十分注意すべきであろう。

これについては平安期以来仏徒によって伝えられた一種の漢音、即ち近年「新漢音」と呼ばれる字音ではないかとも思われるのでそれを研究した飯田博士の「日本に残存せる中国近世音の研究」を検したが、あいにく、



の例はあるが「院」字は見あたらぬ。これらは(ウン)から(キン)への移動と見られ、院の(エン)から(キン)への移動と縁の遠いものではないから、或はこの辺に(エン)(キン)の機微がひそむのかも知れぬ。

ともあれ、これらについて、近世の学者たちが規範的字音に関する意見を述べた諸書を見てみよう。

◎和字正蓋抄(契沖)

〔院〕王眷切、ゐむ。書院を「しよゑん」といふは漢音なり。「ゐ

ん」は呉音なり。

〔院〕王眷切、音「ゑん」或は「くわん」の音もあれど、字書どもに「ゐん」の音はなきを、こなたに常に「ゐん」と用るは呉音にや。

◎和字正蓋要略(契沖)

〔院〕ゐん。王眷切「ゑん」。二四相通か、呉音か。

△三沢云、二四相通とはワ行の第二字キと第四字エとは常に通じ合うとの意。▽

◎三音正鶴(文雄)

〔院〕エン(漢音)——院ヲ「イン」トスルハ皆非ナリ。呉漢トモニ「エン」ノ音ナリ。「入院・書院」ナドノ院ヲ「エン」トセルハ古音ノ正シキナリ。然ルヲ、今ハ反ツテコレヲ謬レリトス。ア、世ニ音ヲ知レル人スクナヒカナ。

◎字音仮字用格(宣長)

〔院〕ゐむ。——サテ院ハ王眷ノ反——「ゑん」ナリ。又、胡官反「くわん」(漢)、「わん」(呉)ノ音ハアレドモ、「ゐん」ノ音ハ見エズ。同韻ノ諸字ニモ第一ノ音ノ例ナシ。猶考フベシ。

(二十九丁)

△三沢云、第二の音とはキのこと。▽

右の諸書で見ると、「院」に対し(エン)は正音、(キン)は「呉音なり」「呉音にや」「呉音か」「非なり」「見えず」など

大体において不明か又は否定的である。

以上で、日本では元來、字音としては漢土の字書や韻書を金科玉条としているものであつて、「院」の場合は(エン)を正音とし(キン)を俗音としている態度が明らかである。然し、その(キン)なる俗音は滔々として日本の漢語界を風靡し、(エン)なる正音が氣息えんえんとしているのはどうしたわけか。一体この(キン)という字音は何時どこで発生したものか。和名抄の記事では漢土において、すでに俗音と見られていたような様子に取られるが果してそうか、其の他の書ではその点明らかでないというべきだろう。

四、漢土の韻書

「院」に対する、日本の字書類を一覧したところで今度は眼を転じて漢土における歴史的な字音の姿を検する順である。漢土の字音の考察は、日本の推古朝にあたる隋の時代に、従来の字音を集成し整理して作られた陸法言の「切韻」にさかのぼって、それを基点として展開されるべきである。「切韻」という韻書は先頃まで完全な姿のものが残っていなかったが初唐の末の王仁昉(オウジン)が原作に増補した「刊謬補缺切韻」(王三と略称されるもの)が近年発見せられたので、そこから手をつけて行くのが頗当である。

◎切韻(王三)(唐、八世紀初頭に成る)

〔桓〕胡官反……ハ衰√周垣、或院……

△三派云、或は院とも書く意で、音は桓と同じ胡官反、日本音に直すと、さし当りクワンであり本来は濁音であるから、呉音ではグワンと見る。▽

◎説文箋韻譜(五代に成り、音は唐韻による)

〔院〕①胡官反△平声、クワン▽

②王眷反△去声、エン▽

◎重刊「広韻」(北宋)

〔院〕①胡官切△平声、クワン▽

②王眷切△去声、エン▽

◎集韻(北宋)

〔院〕①胡官切△平、クワン▽

②委遠切△上、エン▽

③平眷切△去、エン▽

△三派云、反切下字の「遠」から推すと③の呉音はワンとなる可能性がある。▽

「大字典」「諸橋大漢和」および、中国の「中華大字典」は右の集韻の三音を支柱としている。

このように中古の古典音は右の三音の範圍を出ていない。ここに、考えて見ねばならぬことが一つある。それは、さきにちよつと

誤れた「院」と同じような形の「員」の中古音である。それはどうなっているのか前述の韻書どもを覗いてみよう。

◎切韻 (王三)

〔員〕王衛反、(平声)。《日本流に直すとエンに当る。これ以外にない。》

◎說文解詁韻

〔員〕王衛反、(平声)。《三沢云、エン。》

◎広韻

〔員〕①王衛切、(平)、エン。

②五分切、(平)、ウン《雲と同音》

③王衛切、(去)、ウン (姓也)《運と同音》

◎集韻

〔員〕①王衛切、(平)、エン。

②五分切、又五分切、(平)、ウン。《雲と同音》

③王衛切、(去)、ウン。(姓也)《運と同音》

④王衛切、(平)、エン。《雲と同音》

右のうち、集韻の最後の「王衛切」(平)は最も注目を要する音切で、契沖は、古く「唐名郡」(唐ナベ)という地名《和名抄には為奈郡とあり、伊勢の郡名》に「員弁」という漢字を充てているから「員」は古くから「ゑん」と訓まれたのであろうと正監抄に言っている。この外、「運」(ウン)、「韻」(エン)の二字もこれに

類する問題を孕んでいるのであるけれども、これまた混迷を避けるため此処では控えずにおく。

五、「キン」の発生

さて、以上の事実をとりまどると、漢土の中古の正音としては「院」に対して(キン)という字音は見当らぬが、類似の「員」が北宋の集韻に(キン)という新音を以て正式に認められている。もちろんこれは「院」の字音とは直接の關係とて無いが、「院」「員」が同じように(エン)という正音を持っていながら日本では専ら(キン)で行われて来たという所に共通点が見いだされるのである。

集韻の編せられた年次については二説があり、宝元二年(一〇三九)と治平四年(一〇六六)とであるが、その差はわずかに十七年に過ぎぬから問題とするに足らない。この年代は我が平安朝の後半、後朱雀、後冷泉朝、頼朝執政の時代であって、その前の天曆四年(九五〇)には既に日本に「広韻」が伝来まられていたことが九条師輔の「九曆」という目録に見えている。その時代は漢土ではまだ宋以前、五代の時分に当るから、広韻といっても唐代の體にかゝるものであろうし(注2)、もっと以前の「和名抄」でも多くの韻書を活用して居り、更にそれ以前の「新撰字鏡」などに「切韻」の字が夥しく引かれているなどから見ても、北宋の「集韻」は成立後

やがて日本に渡されたことと思われる。然し、「員」に対して(エン) という正音があるに拘らず、それが全く忘れられて専ら(キン) という字音だけが日本に行われるようになった原因として、集韻がそれを日本にもちこんだのであると簡単に考えることはできない。何となれば、集韻の成立より百年以上も前の和名抄に「員弁」(キナベ) という使用例があつて見れば、「キン」という字音の實際使用の時期はもっと古いことであらうし、集韻よりもずっと前に、日本では「員」(キン) を正音と見ていたとしか考えられないからである。それに、史記の有名な「伍員」は「ゴウン」と発音することも日本では常識となつてゐる。だから日本人は「員」に対して(キン) が正音で、人名の時は特に(ウン) という音もあると信じていたわけである。(キン) と(ウン) との関係は「雲」や「運」の類型で、「院」とは何ら関連のない別箇のケースに属するものである。ここにいたつて字音における漢土の音韻体系と日本のそれとは可なり鋭く対立することになる。

一体、「集韻」という書は従来の「切韻」「広韻」の体系を継承しながら、時代的にも地方的にも広範囲なもろもの反切を蒐集網羅して居り、そのために内容の上で相当な混雑も生じて来ているのである。その中には、よほど古い反切で、「切韻」はもとより「広韻」などにも収容せられず、又、正音と認められて居らず、わずかに地方の方音として残つていたものも数多くあつたと考えられる。

「員」に対する(キン)の音の如きは、前述のように、日本に古く伝わっている所から観ると、漢土の後世の訛音と考えるよりは、古い時代の音が彼の地では忘れられ、又は地方音化して、却つて日本に正式に残存したものではないかと考える方が筋が通つてゐるに思ふ。とにかく、「員」(キン) という字音は、日本だけで訛つて発生したものでないという事だけは明らかであり、それと共に(キン) という音が中国の近世の訛音でもないことは明らかである。

ところで、「院」の方はどうか。

「院」に対する(キン) という字音は、「員」の場合とは違つて、漢土の古い韻書の中からは正式なものとして見出すことができな。しかも現実には日本で(キン) と読んでゐるといふのは一体どういふ原因によるのであらうか。これについては、

(1) 正音の(エン) をば日本人が聞き訛つて(キン) となつたのか。殊には朝鮮を経由して流入した場合など、そのことも考えて見ねばならぬ。(注3)

(2) 或はどこからか「院」(キン) という漢土の地方音が流入して、今までの正音(エン) を追い払つてしまつたのか。

(3) 或は同じ型の「員」(キン) に引きずられて「院」にも(キン) の音ありと類推したのか。

(4) 或は古く漢土で本音(エン) に対し俗音(キン) が発生し、

それが阿音とも日本に流入し、偶然に俗音の方が勝ち残ったのか。

(5) 或は「院」の本音は(エン)ではなくて(クワン)であったのが(クワン)→(クエン)→(クキン)と転じ、音頭が弱くなって(エン)と(キン)とに化し、そのうち(エン)が正音と認められて漢土に落ちつき、(キン)が日本に伝わって日本の正音となったのか。公員塚中辞典ではこれと同方向の説明のようである。▽

このようにいろいろな観方・考え方が起るであらう。

六、中国の方音

そこで、われわれの作業の方向は自然に、中国各地方の方音へと向けられねばならない。現在、中国では各地区の方言の調査に大わらわの状態にあり、周到にして精密なる方言研究、ことに方音の探求が行われていることは学界の慶事と云わねばならない。今までに公表せられた報告の中から「院」の字音を探してゆくことになるが、此処でちょっと現代のそれに先だって、昔時の方言の記録の中に何かの手がかりが無いかどうかを、念のために調べたい。

漢の揚雄の「方言」は語に注するに語を以てしているので其の音を知る事が少ない。例えば「肖・類は法なり。」の如きである。

後魏の「廣雅」に対する隋の曹憲の音注には「院は桓なり。」と

ある。「院」(クワン)の音はここにも見えている。然し「院」は「垣」(かき)の義が主であるから「垣」(エン)も亦古い音であらう。とにかく右の二書まではまだ(キン)という音が見出せない。

唐中葉の秦地方(唐都長安を中心とした地方)の方音に拠ったといわれる「慧琳一切経音義」の字音の特色を研究した黄洋伯氏の同音義「反切攷」によれば、「院」の反切は「遠怨反」(平声)で、他の字音との関連において「エン」と判断する。降って、チベット語音との対照によって示された「唐五代西北方音」(羅常培の研究)によっても

un wan wen wen un (何れも去声)

運 遠 垣 員 云

などで、「院」そのものは見えぬが、「運」以下眼を驚かす音ではない。唐の長慶二年(八二二)建立の「唐蕃会盟碑」の中にも「院」は見えぬが、「元」(on wan)の程度で別に奇観とすべきものはない。ただ同書で此の五代の頃の音と現代の西北方音とを比較している表があるが、興味ぶかいことは、唐・五代で(wan, wen)と考えられる字音を現代に陝西・山西地方の

西安では(ɣan) 三水では(ɣan)

文水では(ɣan) 興県では(ɣan)

と発音していることで、その中でも山西の興県では「エン」を「中

ン」と發音していることになるのである。この地方は古昔の音を多く残しているので有名なそうである。この「キン」も「エン」が崩れたと見ることもできようが、古くは「キン」という音もあったのだという風に見るべきではなからうか。

◎現代の北京音〔院〕は〔Yuan〕。

◎中東部の浙江省では、金華音を採ると、〔院〕〔Yan〕読音、〔Ye〕口語音。

◎閩音を代表するアメイ音では、〔院〕〔Yan〕。

◎江西省の臨川音では〔院〕〔Yen〕。

◎粵音を代表する広州音では〔院〕〔Yim〕。

その他、福州音〔Fung〕、寧波音〔Nan〕、客家音〔Yen〕、温州音〔Wen〕、揚州音〔Wei〕など何れも〔Yin〕乃至〔Im〕という形を見出すことができない。ただ、「粵音韻彙」では〔院〕〔Yin〕となつて居り、これは〔Yin〕に近い音だと考えられる。

七、周秦漢の古音

「院」の字音をもとめてわれわれの試みた巡礼は、兩脚がくたくたに疲れただけで遂に殆ど得るところがなかった。残された道は恐らくただ一つ、先秦の古音をさぐることである。その道に進むために、今までの探求の中から命の綱ともたのむべき箇条をさがすわずかに次の三項目が残されている。

(1) 日本の平安中期にすでに「院」〔Yin〕の俗音が存在したことを知った。而もそれは日本における俗音と見るべきではなくて、唐の「將飭切韻」にある句と見られるから、早くも唐代に〔Yin〕という音が〔Yen〕と並んで用いられたことになる。即ち〔Yin〕という音は頗る古いものらしいということ。

(2) 「院」と似寄りの「員」の字音として北宋の「集韻」で始めて〔Yin〕の音を加えられたこと。これは〔Yen〕が後世にいたって崩れたものと見えるかも知れぬが、前項のように唐代に早く「院」〔Yin〕の俗音が存在したことから考えると、古い「員」〔Yin〕の音が長い間古音の世界からはなれて俗音として姿をかくしていたのを「集韻」が拾い上げたと見るべきものである。

(3) 現代中国の方音のうち、山西省の興県において「院」〔Yin〕の音があること。この地方は古い音を多く保存しているので有名なであること。

この三項目の事実を見据えて熟考すると、「院」という字が漢魏以前の所謂「古音」の時代にはどういふ姿であつたかを知りたいという衝動にかられる。

然し、周秦漢の古音をさぐるということは容易なわざではない。魏晉六朝以降の中古音までは反切という表音法があるから、いろいろ接排して見ると、音価もどうやら推定し得られようが、古音の時代には反切がない。随つて字音の「音価」をつかむ方法がない。わ

すかに、文字構成上の諧声法(宙符)と詩賦の押韻をたどって音韻の頭音や韻の「類型」を知るのみである。しかも、頭音の類は「双声」という熟語形式によって模索し得られる理窟になってはいるが、古の双声は相当に蕪雑であるから、どこまでが真実かおぼつかない。押韻による「韻」の分類にしても、様々な通押があるので現代から古韻の実体をつかもうとすることは可なりの冒険に属する。たとえば中古音といわれる唐時代の押韻にしても「新」と「春」とが押韻せられ、「中」と「風」とが押韻せられ、「厠」と「誰」とが押韻せられ、「異」と「殊」とが押韻せられ、「門」と「言」とが押韻せられている。ましてや先秦の「毛詩」や「楚辭」の押韻からその音価を判ずることは甚だ困難なものと思わねばならない。

とは云うものの、考えて見ると、「院」の(エン)と(キン)との差は、つまりは(オン)と(イン)との差、更につきつめていえば母韻の(エ)と(イ)との差に過ぎない。(エ)から(イ)が生じたのか、(イ)から(エ)が別れたのか。こういう簡単な線で上古の詩賦を検して見ることにしよう。それには、明末清初の顧炎武「唐韻正」や、満田博士の「支那音韻断」大島博士の「支那古韻史」黄侃の「古本韻・今变韻」の説などによって概括的に音韻変遷のあとをつきとめると共に、その用例を検して行けばよいと思う。但し、何れの場合でも「院」という文字を挙げた実例は一つも出て来ないので、文字通り概括的に(エン)から(キン)へという線、

即ち(en)——(in)という見当で見えていくより致方がない。

○「唐韻正」では古音を論ずるに、

▽〔桓〕は古に〔真・諄・臻・文・殷・元・魂・寒〕と通じて一韻たり。△三派云、これは後世で真・諄……等に分かれた韻を古は一まとまりの韻として扱っているという意味である。▽

▽〔仙〕は古に〔真・諄・臻・文・殷・元・魂・痕・寒・桓・

剛・山・先〕と通じて一韻たり。

という簡単な表現しかしていない。

○「支那音韻断」も似たようなもので、

▽後世の〔元・寒・桓・剛・先・仙〕は漢代には一括して押韻せられた。

▽先秦にも亦同様に一括して通用せられた。

という結論を出している。われらの求める〔院〕の音は右の〔桓〕と〔仙〕との韻に包含せられているから、いずれ先秦から漢代までは〔院〕は正式にはただ一つの字音しかもっていなかったに違いない。

○「支那古韻史」になると、後世の〔先・真〕をば古音の第六部と称して一括し、〔山・剛〕〔仙・元〕を古音の第八部と称して一括し、この第六部と第八部とは先秦には詩賦の押韻に互に通用せられたとして次のような例を多数挙げてゐる。その中から難字を含まない五例だけを引くと、

○楚辞(発・血・実・日) ≪即ち今日の日本的な目から見ると at
・ et・ it の通用≫

○詩経、賦風(葛・節・日) ≪at・et・it の通用≫

○〃〃 (淵・身・人) ≪en・in の通用≫

○〃〃 小雅(演・臣・均・賢) ≪in・en の通用≫

○〃〃 (田・千・陳・人・年) ≪en・in の通用≫

右のうち「発」は後世の桓韻と、「葛」は後世の寒韻と類を同じうする入声である。これによって「桓・元・真・諄」が一括して観られ扱われたということがわかる。

この傾向は周秦を越えて漢魏六朝にも及んでいて、例えば晋の陸機の作詩にも(裂・質・節・室)の通押が見られる。このような漢字音の(e)と(i)との近似は実はわれわれの常識として現在何の不思議もなく迎え入れられて居て、例えば諸声上同じ声符を持ちながら因^{イン}・烟^{エン}・鎖^{セン}・頃^{ケン}・便^{ベン}・便^{ピン}・吉^{キツ}と結^{キツ}・節^{セツ}と櫛^{シツ}・失^{シツ}と迷^{ミツ}・室^{シツ}と姪^{シツ}のような現象が今日でも生きているのである。これは必ず古音の或る韻(それは可なり幅のある韻)から(e)と(i)との方向に分かれたものであろう。この場合の古音である或る韻は(e)であったか(i)であったか、それとも(e) (i) 以外の音(例えば a)であったか、その辺はつきりとはわからない。

中国近代の韻学者、黄侃はその「古本韻・今変韻」の説の中で、
○真は先の変音 ≪三沢云、先 → 真・諄≫

○臻は先の変音 ≪先 → 臻≫

○仙は寒・桓・先からの変音 ≪寒 → 仙、桓 → 仙、先 → 仙≫

○元は寒・桓の変音 ≪寒・桓 → 元≫

と云っている。右を綜合して、われわれの常識の尺度ではかれは、

an → en en → in

という順に受け取られる。「廣韻」に収められた「院」(クワン)という平声音は右表の「桓」の音にあたり、(エン)という去留音は「仙」の音にあたり、又、「集韻」の「員」(キン)という平声音は「真・諄」の音にあたる。

そういう古音の音価推定はなかなか面倒であって学者によって異なっている。ここに引くのは中古音の例であるが例えば Karlsen 氏は(注5) 隋唐の音を

桓 (-wan) 元 (-iwan) 仙 (-iwen)

真 (-ten) 諄 (-iwen)

と推定し、董同龢氏は(注6) 同じく隋唐音を

桓 (-uan) 元 (-iuan) 仙 (-iuən)

真 (-aen) 諄 (-iuen)

と推定して居り、用字に若干の差があるが概して両者共通しているといつてよからう。

この中古音に対する推定音は「仙」と「諄」とに大差がなく何れも日本的にいえば(エン)に近いということを示している。この事

柄を前記した順炎武や満田・大島両氏の敘述したことに照合すると、古音としては「桓」も「元」も「仙」も「諄」も似たり寄ったりの音で、常に問題なく通押せられていたということになる。換韻すれば (an) と (en) とが非常に近い、つまり (an) と (en) との中間的な音であったということになる。であるから、時と所とにより、又、その頭音の変化も加わって「桓」(クワン)が「垣」(エン)ともなり、「緩」(クワン)が「掇」(エン)ともなり、「院」(クワン)が「院」(エン)ともなり得るわけである。

八、正音と俗音

折角一縷の希望をつないで来た古音にも「院」(キン)の故郷を発見することができなかった。わずかに(アン)から(エン)に転化する可能性を確かめたに過ぎない。然し、古音時代に「桓・元・仙」と同類とせられた「真・諄」が、中古音時代に入ると、別な韻族に変っていることには強く注意が引かれる。即ち「真・諄」は中古音では「桓・仙」と切りはなされて、詩賦に互に通押せられることが無くなってしまったのである。「元」だけは「桓・仙」と「真・諄」との中間に往来し浮遊する韻と化している。(注7)

これは、つまり、(an/en)から(ian)を経て(ian)という形になったわけで、分離の事実には六朝の押韻状態からも、「切韻」の韻分状態からも明らかに指摘し得られる。分離した当時のこ

とを想像すると、「真・諄」においては従来の音が正音と認められつつ、新に発生分離した(ian)は一種の転音、即ち正音に対して俗音といわれるものであつたらう。この(ian)は日本流の発音では(イン)に当り、(ian)は(キン)に当る。これが頓て隋の「切韻」では、新音が正音と認められて旧音は捨てられ、桓・元・仙・真は一々別の韻として四部に分けられるに至つたのであるから、この分離作用の起つた時期は、おそらく「切韻」以前、古音と中古音との過渡期間と見ねばならない。

従来「仙韻」に在つた「員」が「真韻」に変わったのも、この機運にまきこまれてであらう。但し「切韻」以下、韻書の歴史をながめると、「員」(キン)が正音と認められて韻書の表面に浮かび上つたのは北宋の「集韻」になつてからである。ここで考えて見ねばならぬことは、中国は尚古主義の甚しい国であつて、古い伝統を容易に改めないということである。すでに諸家によつて言われたように、現実に通行情の音として新しい音が盛行していても、訓詁のための反切や、詩賦の押韻には古典音を正音として継承し、これを墨守して、新音を仲々表面には受け入れなかった。それ故、たとえ、六朝に新音「員」(キン)が起つたとしても、これを正音として認めたのは北宋になつてからであるというわけである。

さて、「員」についてはそれで良いとして、われわれの追求している「院」の方はどうであらうか。

「院」は前述の「桓」の韻類に属するから、古くから(クワン)の音を保つて来たが、後には頭音を落し、同時に韻形も亦変化して(エン)の新音を生じ、暫く(クワン)と(エン)との二音が並行し、何れも正音と認められたことは「唐韻」や「広韻」の内容によつて知られる。

右のような変遷の跡を、いま、「院」一字に限つて、この字を中心として敘述し、本問題の結論を導き出したいと思う。

(1) 古音時代には韻域が広く、「院」は(wan)と(wen)の中に含まれていたが、この韻域は追々兩極に二分し、

(2) 漢魏晉の時代には(wan)と(wen)と(wan)とに別かれ、かつ成長し、同時に「院」(クワン)の頭音が脱落する傾向を生じた。

(3) 右のことを日本風に仮名で示すと「院」(クワン)の外に、頭音の落ちた「院」(ウワン) → (ウエン)をを経て → (エン)という新音が生れ、(クワン)は在来の正音と認められたが、(エン)は始めは正音と認められなかった。この事態は漢魏晉から更に六朝にも通じてのことであつたらう。従つて隋の「切韻」には(クワン)の一音しか載っていない。

(4) 「院」(クワン)の頭音の脱落したのと同じ傾向と見られるものには次のような字音がある。

回(クワイ)・壞(クワイ)・会(クワイ)・和(クワ)

慧(ケイ)・皇(クワウ)・濱(クワイ)・追(キ)

右諸字の頭音のあるのは皆「匣母」の字、無いのは「喻母」の字で、匣母・喻母はもと同一音形のものが分派したのであることは殆ど定説となつてゐる。

(5) 唐に入つては、在来の(クワン)を始め、新音の(エン)をも正音と認めるようになったことは前にも言つたように「唐韻」に両音を収めたことでわかるが、これより先き、魏晉の頃にもう一つの転音の傾向が生じ、前述の「院」(クワン) → (ウワン) → (ウエン)のあたりから更に別途に進展して(キん)という方向へ進み、遂に「院」(キん)という新転音が(クワン)(エン)の二つの正音に対して一種の俗音して発生したと想像せられる。

唐代と見られる蔣勗切韻に「院」(エン)を正音とし(キん)を俗音として挙げてあるのは、この時すでに(クワン)は実際の通行音としては廢滅して居り、反対に(キん)という俗音が無視することのできぬ程な勢を得ていたからに相違ない。

(6) ここで、韻書的面における古典音と俗音との扱い方について考へて見ると、同じ唐代のものではあるが、唐韻の如きは「院」に(クワン)(エン)を正音として掲げているのに蔣勗切韻は(クワン)を掲げず、(エン)を正音とし、(キん)を俗音とし

て注記しているのはどう解釈すべきであろうか。しかも唐韻の系を引く広韻も集韻も(クワン)(エン)の範囲を出ていないということを思いくれば、唐韻以下の所謂「切韻音系」と「蔣勛切韻」の音系との間に明らかに差のあることを示しているとせねばならない。

(7) そこで考えられる事は当時、(クワン)という古口音は既に通行の面からは脱落したが、古典音として切韻音系の中にうけつがれていた形骸的な音で、蔣勛切韻はこの実質のない字音を捨て去ったものと思われる。時代的に見ても北宋の集韻までは存続した「院」(クワン)が、次の朝である元の「中原音韻」では消えている。この書は実際の通行音によったもので、「院」は「先天韻」の中に配しているから、音価はまさしく(エン)一音なのである。

(8) (キン)という俗音の発生事情と発生時代について右のような考察を加えたとして、さて、その俗音(キン)が如何なる事情から、日本においては正音たる(エン)を排除して殆ど(キン)一本で行われるようになったのであろうか。

(9) それには「院」という文字の渡来した時期をさぐらねばならぬが、古事記には見えず、万葉には一語だけ見えるが、その説方は不明である。とにかく推古朝以前であらうと思う。而してその頃の日本語に於ける母音の状態は(e)と(i)とに明らかに分

別し難い面があり、ふとした拍子で(e)が(i)となり又その反対になることもあったように見られる。推古朝の万葉仮名「彌」が同一の句の中で(ミ)とも(メ)とも読まれるところに用いられているなどはその好例であらう。所で「院」も(エン)と(注8)

(キン)との二音が日本に伝えられ、一は正音、一は俗音であるけれども、漢土はともかくとして日本においては、字音の正俗についての潔癖さはそれほど強いものではなく、或る時期の間(エン)と(キン)とが混用されているうちに(これは理論的に説明できぬが)自然の勢で(キン)が日本での常用音と化してしまつたものと視ることができないだろうか。(有坂「上代音韻攷」第三部参看。)

(10) 結果から見れば正音が負けて俗音が勝つたということになる。かくして平安中期の和名抄の頃には紛れもなく日本の通行音は(キン)であつて(エン)ではなかったと考えざるを得ない。和名抄の撰者、源順は「院」の字音について一つの困惑を感じたであらう。彼れの手許に在る漢土の韻書の類は殆ど皆「院」(クワン)(エン)を正音としていて(キン)という音をは認めていない。然るに当時日本では、あらゆる使用面において「院」は(キン)であつて(クワン)でも(エン)でもない。和名抄は元來専門的な字音の研究書ではなくて一種の啓蒙的な辞書であるから、漢土の韻書に従えば日本通行の(キン)が消えてしまう。そこで

あれこれ探して見ると、或る地方音によると思われる「蔦防切韻」が(クワン)を掲げず(エン)を正音としている。(エン)正音の点では他の韻書と共通しているが、その他に(キン)を俗音として掲げているのを発見して、これを探って日本の通行音に対応する二拠点としたのではないかと想像せられる。もし、そういう事情でなかったとしたら、もつと公認性のひろい陸韻や唐韻を引く筈ではなかったかと思うのである。こういう事を確かめるためには蔦防切韻の引用部分全部を集めて、これを他の切韻音系の韻書のそれと比較研究を試みる必要がある。(注9)然し、今その暇はない。

(11) 万葉集には「西院」という一語があるが、当時の字音は明らかでない。又、和名抄よりも前、奈良朝末・平安初期の頃、日本人の手に成ったと推定せられている「新訳華嚴經音義私記倭調抄」(小川氏蔵)の中に「庭院、々音員」と見える(注10)。これで当時「院」と「員」とが同音であったことはわかるが、「員」にも(エン)という音がある筈だから、「院」の音価が当時(キ)だったとは断せられぬ。然し、もし「院」(エン)を示すつもりなら、もう少し別な字を使いそうなものなのに、わざわざ(キ)という転音のある「員」を使う以上、恐らく二字とも(キ)が音価であったろう。当時の「院」が万(エン)を正音として盛行していたということになると、和名抄と程近い頃の「源氏

物語」や「枕草子」の「院」や「院司」も皆(エン)・(エン)と読んでいたことになる。が、恐らくそうではあるまい。この際、前に述べた和名抄に地名の「員弁」(ゐなべ)のあることなどが有力な証左となろう。

(12) 尤も前記した通り「和漢朗詠集」の中に「院」(エン)という訓み方がある由、山田博士の解説にあるが、それは「朱雀院」を指されたのであろうか。然るに博士の扱われた岩波文庫の字音のよみ方は大半が鎌倉時代以降、その他は室町時代までのものとの事であるから、これも学者たちの漢土の字書韻書を拠点とした正音よみの態度の産んだものであろう。この書は正確に漢音にようと努力した跡が歴然残って居り、「上」は必ず(シヤウ)と清んでよみ、「二」は必ず(ジ)で決して(ニ)という呉音は採らぬなど、学者が当時の通行音を強くはねのけて無理に字書式な漢音でよんだものと察せられる。

(13) 室町末から江戸初期までの節用集に「書院」(シヨエン)・「入院」(ジュエン)という読み方の見えることは前に挙げたが、これは仏家が直接に漢土の呉音として後世的に受け入れた読み方の残存したものであろう。この場合の(エン)は「入院」などの用例から見ても呉音の(エン)であるというべきである。右の二語以外に(エン)という音の見えぬのは、既に日本化した(キ)という音に押されたためと考えられる。

九、結 び

曲折した隘路をたどって此処までやって来たが、もともと、古い字音の考察は殆ど疑問と推測の連続である。一つの推測を生かす為めには同じような例子を数多く発見することで、それは今後行わねばならぬ仕事である。だから、類例を捕えかねて途中で空しく消えてしまう推測もある。が、われわれは問題の要点を逸することなく、根気よく解明に努力せねばならない。要点とは何か。

①「院」における(エン)と(キン)との差は、日本国内で起ったものか、それとも漢土でか、或はその中間で起ったか。

②(キン)という字音はいつ頃生じたか。

③いかなる径路を経てその新音は生じたか。

④漢土から新音が移入せられたと見る場合、それはいつ頃伝来したか。

⑤旧音の系統と新音の系統との異同はどうか。

これらの要点について一応暫定的な答を述べては来たが、この要点を一本の樹の枝の左右への岐れ目と見て、そこから更に横の面に手をひろげ、多くの例を拾い上げてこれを帰納し、その推測を確實なものにして行かねばならない。この一編は、そうした方向へのお辟立てとして極く概略を述べたものに過ぎない。

(注1) 説文に「完の声」とあり。

(注2) 雑誌「漢文学」第8輯、拙稿参照。

(注3) 「院」の朝鮮現代音は $\langle \text{원} \rangle$ (ウワン) (ウヨン)。

(注4) 「中国音韻史論考」(武蔵野書院最近刊)に「支那音韻ノ歴史的研究」と題して収む。

(注5) 「中国音韻学研究」(趙元任・李方桂訳)による。

(注6) 「中国語音史」による。

(注7) 雑誌「漢文学」第7輯、拙稿参照。

(注8) 「上官聖徳法王帝説」に等己彌居加斯支移比彌乃彌己等、

(注、彌字或当亮音也)。

(注9) 「將助切韻」の名は「日本国見在書目」から室町末の「言經卿記」にも見えるから、案外長くわが国の学者間に用いられたと見える。

(注10) 「寧楽遺文」に収む。